

学位請求論文審査報告要旨

2013年2月13日

申請者 セペフリバディ・アザム

論文題目 日本語のペルシア語の呼称に関する対照研究

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
桜井啓子

1. 本論文の内容と構成

本論文は、日本語とペルシア語における自称を含む親族内の呼称について質問紙調査およびフォローアップ・インタビューを行い、それに基づいて両言語の親族内の呼称の実態と背景にある社会的・文化的要因を論じたものである。本論文の構成を以下に掲げる。

序章 はじめに

0.1 本研究の目的と問題意識の所在

0.1.1 本研究の目的

0.1.2 呼称の特徴

0.1.3 親族呼称の特徴

0.2 本研究の方法

0.3 本研究の構成

第1章 先行研究とその問題点

1.1 西欧語における呼称の研究

1.1.1 Brown and Gilman (1960) の研究

1.1.2 Brown and Ford (1964) の研究

1.1.3 アメリカ英語における呼称の研究

1.2 日本語における呼称の研究

1.3 ペルシア語における呼称の研究

1.4 日本語・ペルシア語の呼称に関する特徴

第2章 調査方法

2.1 アンケートによる調査

2.1.1 小学生に対する調査

2.1.2 中学生に対する調査

2.1.3 高校生に対する調査

2.1.4 大学生に対する調査

2.1.5 社会人に対する調査

2.2 質問項目

2.3 データ処理の方法

第3章 日本語とペルシア語の呼称の種類とその基本的概念

第4章 日本語およびペルシア語で家族を呼ぶ際に用いられる呼称

4.1 日本語における上位世代の親族に対する呼称の選択

4.1.1 日本語における父母に対する呼称の選択

4.1.2 日本語における祖父母に対する呼称の選択

4.2 日本語における同世代の親族に対する呼称の選択

4.2.1 日本語における兄弟に対する呼称の選択

4.2.2 日本語における弟妹に対する呼称の選択

4.3 ペルシア語における上位世代の親族に対する呼称の選択

4.3.1 ペルシア語における父母に対する呼称の選択

4.3.2 ペルシア語における祖父母に対する呼称の選択

4.4 ペルシア語における同世代の親族に対する呼称の選択

4.4.1 ペルシア語における兄弟に対する呼称の選択

4.4.2 ペルシア語における弟妹に対する呼称の選択

第5章 日本語およびペルシア語で家族から呼ばれる際に用いられる呼称

5.1 日本語における上位世代の親族による呼称の選択

5.1.1 日本語における父母による呼称の選択

5.1.2 日本語における祖父母による呼称の選択

5.2 日本語における同世代の親族による呼称の選択

5.2.1 日本語における兄弟による呼称の選択

5.2.2 日本語における弟妹による呼称の選択

5.3 ペルシア語における上位世代の親族による呼称の選択

5.3.1 ペルシア語における父母による呼称の選択

5.3.2 ペルシア語における祖父母による呼称の選択

5.4 ペルシア語における同世代の親族による呼称の選択

5.4.1 ペルシア語における兄弟による呼称の選択

5.4.2 ペルシア語における弟妹による呼称の選択

第6章 日本語およびペルシア語における家庭内の自称表現

6.1 日本語における家庭内の自称表現の選択

6.2 ペルシア語における家庭内の自称表現の選択

第7章 おわりに

7.1 本研究のまとめ

7.2 本研究で得られた知見

7.3 今後の課題

参考文献

付録

2. 本論文の概要

本論文は、質問紙調査をとおして日本語とペルシア語の両言語において親族内の呼称がどのように用いられているかを量的に調査し比較している点で対照言語学的研究であり、フォローアップ・インタビューを併用して調査対象者の年齢や性別、および両言語の親族内の呼称の選択と社会的・文化的要因のつながりを論じている点で社会言語学的研究である。以下、そうした前提のもとで各章の内容を順に紹介する。

第1章では、両言語の呼称研究に大きな影響を及ぼしたいくつかの西欧語の呼称研究が概観され、そのうえで、両言語の呼称研究における本研究の位置付けについて論じられる。

西欧語における人称代名詞を対象とした代表的な研究として、ヨーロッパ諸語の呼称研究である Brown and Gilman (1960) とアメリカ英語の呼称表現の研究である Brown and Ford (1964) を挙げ、これらの研究で、主として power と solidarity と呼ばれる話し手と聞き手の力関係と仲間意識の観点から分析が行われていることが示される。とくに、これらの研究では、ペルシア語の人称代名詞の体系を考える上で重要な鍵の一つである人称代名詞の相互使用と呼称の関係が明確化され、人称代名詞の表現の使用パターンの変化の過程が、その背景にある話し手と聞き手の力関係と仲間意識という社会的関係に関連づけられ、インド・ヨーロッパ語族の言語共同体の均質性が確認される。

第2章では、日本語母語話者とペルシア語母語話者、それぞれ 250 名を対象とするアンケート調査の概要が示される。アンケート調査の対象者は、日本語を母語とする東京在住の日本人とペルシア語を母語とするテヘラン在住のイラン人であり、年齢別に小学5年生、中学2年生、高校2年生、大学2年生、社会人2年目の男女各 25 名となっている。また、本文中で、調査対象者の上位世代の親族（父母・祖父母）と同世代の親族（兄弟・弟妹）とに分け、調査結果を記述することが予告される。

第3章では、日本語とペルシア語における呼称表現の類型とその基本的概念がまとめられる。この章では、人称代名詞、親族呼称、実名、愛称、職業・役割名、敬称に分けて整理され、呼称表現の具体例が幅広く紹介されている。日本語の呼称表現は種類が豊富であり、とくに人称代名詞の多様性が大きな特徴である一方、ペルシア語は、インド・ヨーロッパ語族の一派であるインド・イラン系語派に属する言語であるため、日本語のような多様な人称代名詞は存在せず、宗教上の理由から愛称の使用を避けることなどが示される。

第4章、第5章では、日本語とペルシア語の親族内での上下関係による呼称の使い分けを検討するため、話し手を基準とした目上と目下の親族を想定し、それぞれの親族にたいする対称詞の使い分けを検討している。その調査結果により、以下のような類似点と相違点が明らかにされている。

両言語では、年齢の上下が目上と目下を決める基準となる。つまり、両言語では、目上の人にたいしては親族呼称で、目下の人にたいしては実名が多用される点で類似している。

実名の使用については、両言語とも目下に対して用いるのが一般的であるが、日本語の場合、兄弟のみならず、父母・祖父母といった上位世代に対しても実名が使用される場合がある。また、日本語では実名以外に愛称がしばしば使われる。しかし、ペルシア語では、兄弟

にたいしては一般に実名が使われるものの、上位世代に対して実名が使用されるケースは見られない。また、愛称は、宗教的に使用が好ましくないものとして避けられる傾向がある。

一方、相違点は、人称代名詞の使用である。ペルシア語では、会話のなかでは人称代名詞を使うのがふつうであり、父母や祖父母のような上位世代や、学歴が高く年齢差が大きいきょうだいには尊敬がこもった「shomā (あなた)」という敬称が一般に用いられる。話し手と聞き手が同世代の場合や、話し手が比較的若い場合は、尊敬がこもった「shomā (あなた)」と親しみがこもった「to (君／お前)」という呼称が併用される傾向がある。一方、日本語では、会話の中では、父母・祖父母のような上位世代には人称代名詞をまず使わない。この点で、日本語とペルシア語は対照的である。ただし、日本語では、同世代の男性、すなわち男きょうだいには「おまえ」が、同世代の女性、すなわち女きょうだいには「あんた」が使われることが多く、その点では両言語は類似している。

第6章では、日本語とペルシア語の自称詞の使用実態を調査し、その調査結果から、以下のような両言語の自称詞の使い分けが明らかにされている。

日本語では、自称詞が話者の成長にともなって変化し、その変化は女子より男性のほうが早い。また、父母・祖父母にたいして話し手の年代により自称詞が異なるが、きょうだいにたいして使う自称詞はあまり変わらない。また、男性の「ぼく」「おれ」、女性の「わたし」「あたし」などの伝統的な自称詞にくわえ、男性の「自分」、女性の「うち」の定着が確認されたほか、小学生男子で「こっち」「こちら」という自称詞が広がりを見せていることが確認されている。

一方、ペルシア語の自称表現は、自称代名詞「man (わたし)」と再帰代名詞「khodam (わたし自身)」の二つが中心であり、バリエーションが少ない。家庭内での一人称代名詞の使い方をみると、自分を称するとき、一般に、家族におけるどのような立場の人に向かって相手も誰であろうと「man (わたし)」か「khodam (わたし自身)」を使用する。ペルシア語では、家族だけではなく、学校内、目上の者に対しても、一人称代名詞の使い方は目上・目下の区別がなく、年齢が上がっても自分自身のことを指す表現は変わらないとされる。

第7章では、上述の内容がまとめとして示され、今後の課題が述べられる。

3. 本論文の成果と問題点

本論文には、これまでの呼称研究には見られない知見が数々含まれ、学術的に高い成果を上げていると考えることができる。

本論文の第一の成果は、種々の社会的制約のなかで地道な実態調査を行った点にある。とりわけ、個人情報保護法が全面施行されたあとの日本、社会的な事情からまとまった調査が行いにくいイランにおいて、個人の地道な努力で、東京およびテヘランの小学生、中学生、高校生、大学生、社会人の男女各25名、計500名の実態調査を行った点に本論文の価値がある。

本論文の第二の成果は、そうした地道な実態調査によってこれまでに指摘されてこなかった興味深い言語事実を発掘した点にある。

日本語では、自称詞は成長によって呼称が変化し、小学5年で名前やあだ名を離れて「こっち」「こちら」を多用し、中学生で「おれ」「自分」を本格的に使うようになる男子のほうが、小学5年でも自分を名前やあだ名で呼び、高校生で「うち」の使用が最大になる女子よりも社会化が早いという指摘は、調査によって初めてわかる点で興味深い。

また、女子が父親にたいして「おやじ」と呼び、母親にたいして「お母さん」と呼ぶ非対称性からは、父母の呼称がかならずしも対等ではなく、母娘に強い親密性が見られることがわかる。同様に、祖父母と同居している場合は名前やあだ名が用いられやすいという事実からは、祖父母との社会的距離が呼称に反映されることが看取され、さらに、子どもや孫が中学生・高校生になるにつれて父母・祖父母による「ちゃん」づけが減少し、大学生・社会人になるにしたがって会話での人称代名詞の使用が減少することにも、呼称の選択が、呼ぶ側と呼ばれる側の社会的距離の変化と連動する様子が現れている。

ペルシア語でも、父母・祖父母にたいする呼称が多様であり、日本語と同様に話者の成長におうじて呼称が変化する。また、日本語でも独立心が強くなる時期の男子に「おれ」が増えるように、ペルシア語でも同時期の男子に「to (君/お前)」が増え、大人になってから会話の場面で父母を呼ぶときに、人称代名詞を使わず、省略して済まそうとするあたりにも日本語との類似性が見られ、興味深いところである。

本論文の第三の成果は、鈴木孝夫氏が考えた親族呼称のモデルの現代における妥当性・非妥当性を明らかにした点である。鈴木孝夫氏が考えた1973年のモデルは、日本語の親族呼称は親族内の最年少の者から見た名称で決まるという有力な仮説で、これまで広く受け入れられてきた。本論文の調査も基本的にはその仮説を支持する結果を示しているが、その反証も見つかっている。

たとえば、呼びかけるさいには兄や姉にたいして実名や愛称を使い、会話では兄にたいして「おまえ」、姉にたいして「あんた」という人称代名詞を使う考え方が主流になってきており、「兄貴」「おねえちゃん」などの親族呼称は廃れつつある。このことは、少子化にともなってきたきょうだいが対等になりつつあることを示している。

こうした言語現象は、すでに示した成長段階による呼称の変化などとともに、鈴木孝夫氏のモデルが現代的な文脈のなかで修正される必要があることを示している。そして、そうした修正のさい、本論文は貴重なデータを提供しうると考えられ、呼称研究における理論の精緻化にも寄与することが期待される。

このように優れた面を備えた本論文であるが、一方、問題点も存在しないわけではない。

第一の問題点は、調査法である。本論文の調査法は質問紙調査による意識調査であり、運用調査ではない。そのため、現実の場面では異なる呼び方をしていたり、そのときの気分によって呼び方を使い分けたりしている可能性もある。

こうした呼称の運用調査は家庭内のプライバシーの問題もあり、困難であることは想像に難くないが、数家族でもその実態が記述されていれば、本論文の記述はさらに厚みを増していたように思われる。

また、今回の調査のように、話者の意識調査に限定したとしても、第三者がその場にいるときといないときという要因を含めると、呼び方はかなり変わる可能性がある。また、ある

世代の呼び方が、ほかの世代にとっては違和感がある可能性もある。その意味で、今回の調査結果にたいする世代別の再評価を行い、現実の呼称にたいする規範意識や社会的許容度を見るという新たな研究の方向性も構想しうるだろう。

第二の問題点は、注記の不足である。たとえば、イラン社会で呼称に愛称を使う人が少ないのは事実であり、その背景には宗教的な理由がある。たとえば、モハンマドやファーテメといったアラビア語起源の宗教的な名前や、ジャムシードやホスローといった古代ペルシアの英雄に由来する名前などはたしかに愛称にはしにくい。しかし、ゴルナール（花の名前）やシャブナム（朝露）といった自然に由来する名前は愛称として用いられる可能性はある。

また、今回の調査で、自称詞は「man（わたし）」「**khodam**（わたし自身）」の2種しか出現しなかったのは事実であろう。しかし、イランは社会的な呼称が複雑な文化圏であり、たとえば「**bande**（小生）」「**nokar**（わたくしめ）」のような自らを低める呼称などがある。そうした呼称への言及がないと、イラン社会の知識のない読者は誤読してしまうおそれもあるだろう。

さらには、首都テヘランには、イラン人口の4分の1弱を占めるトルコ系民族アゼリーが多く暮らしている。学校教育の影響で、アゼリーのあいだでもペルシア語が母語となりつつあるが、家庭内ではアゼリー語とペルシア語を併用している家族も多く、伝統的なテヘランのペルシア語母語話者とはやや異なる傾向を示す可能性もあることには、少なくとも言及が必要である。

こうした点については、たとえ筆者自身にとっては自明の事柄であったとしても、読者の便宜のために、注などを用いて、より詳細に示すべきであっただろう。

しかし、地道な調査の積み重ねによって本論文が示しえた貴重な学術的な知見は、そうした問題点を補って余りあるものであると考えられる。また、上述のような問題点は、筆者も十分に承知していることであり、今後の研究の進展によって克服されるべき性格のものであるだろう。

4. 結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考ええる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
桜井啓子

2013年1月22日、学位請求論文提出者、セペフリバディ・アザム氏の論文「日本語のペルシア語の呼称に関する対照研究」にかんする疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのにたいし、セペフリバディ・アザム氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、セペフリバディ・アザム氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。